

## 第2章 授業で勝負する

### 第1節 理論的ブレンを持つ

教師は授業で勝負する、と言います。では、その専門性をどのようにして身につけ、自らを磨き高めていくのでしょうか。それが今回のテーマです。

#### ■理論的ブレンを持つ■

##### 1 経験は○、経験主義は×

同和教育推進教員をしていた1993年ころのことだ。学力向上の地域指定を受けて、低学力傾向克服に取り組んでいた。子どものつまずきを分析する中で、繰り上がり・繰り下がり処理の仕方が担任によってまちまちであることに気づいた。東京のある小学校で実践しているワークシートが、子どものつまずきを減らせるとワークグループは考えた。それを全校で採り入れようと提案したが、これが一朝一夕にいかなかった。経験の長い教師からの反発である。擦った揉んだの挙げ句、「点数を上げたらそれでええねやろ」と啖呵を切られてしまった。なぜそこまで“自分流”に固執するのだろう。

教師は、経験を重ねることで技量を上げていく――というのは事実だ。経験年数と授業技術は比例するとは言えないのだが、一般的にベテランの方が上手い。経験は大事だ。うまくいった経験には「成功」のエキスが詰まっているし、うまくいかなかった経験にも「成功」に導くための芽が詰まっている。自分の実践を検証する教師は、間違いなく伸びる。

しかし、「経験主義」となると、話は別だ。ここで経験主義とよんでいるのは、上のハナシに出てくる教師のような態度を指している。自分の経験を唯一の「ものさし」としてものごとを判断し、また、自分の経験則に固執する傾向が強い。それは、自信とかプライドとはちょっと違って、私には自信のなさの裏返しとして自分の殻を破りたがらない態度に映っている。

自分の経験が唯一の尺度になると、それ以上の世界はもうない。つまり、経験値以上の伸びしろはないのだ。経験主義を否定するのはそのためである。

## 2 理論的裏付けが実践を確かなものにする

経験主義に陥らないためには、自分の実践を客体化して見つめる目が必要だ。

私は、10数年前までよく大阪の実践に学びに出かけた。なぜ大阪だったのか。私のライフワークである同和教育の手本となる実践校がたくさんあったことが、理由の第1。そして、実践校にはほぼ間違いなく大学の先生が関与していたことが、第2の理由である。

大阪には、大阪教育大、大阪市立大、大阪大、関西大等々、同和教育を理論的にリードしてきた先生がたくさんいた。その先生たちが、自分の理論の実践フィールドとして学校現場に入り込み、研究をサポートし、授業づくりを支えていた。発表会ともなれば、学校現場はナマの実践を提供し、学者がその実践を理論づけてくれた。私には、これ以上の学びの場はなかった。

奈良の公立学校の現場で、大阪の例のような機会に恵まれることは、まずない。私は、大阪の実践を見ながら自分の実践のアプローチを重ね、自分の実践を理論づけるという学び方をしてきた。あるいは、大阪で見た実践をなぞることで、実践を支えている理論を自分の内に取り込んできた。

さらに、講演を聞いた学者たちの著書が、学びを深め、広げてくれた。自分の中に実践のイメージができるまでは現場を見ることが不可欠だが、次からは文字情報で結構事足りるものだ。両者相まって、私の実践を支える理論家集団を形成しているのである。

自分の実践を客体化して見つめる目は、自分の中の理論家集団が充実していくのに比例して養われていくものだと考えている。

自分の実践を客体化できるようになると、より優れた実践を何のためらいもなく受け容れられるようになる。そして、それが子ども(教育)に謙虚に向き合う教師の態度だと信じている。

## 3 書齋を「理論センター」に

ブレーンと言っても、まあ片想いの恋のようなものだ。それでも、書齋が自分

の実践を支えるブレインたちの「理論センター」だなんて、なんと贅沢なことだろう。私の場合、数十人のブレインの面々に囲まれて毎日を過ごしている。(9月の末に、1500冊ほど本を捨てた。百科事典、全集もの、月刊誌・季刊誌などのほとんどすべてだ。手許には、文庫・新書、単行本が1000冊ほど残った。自分で言うのも変だが、いささか本オタクなのかもしれない。涼しくなった書齋は、仕事空間から癒やし空間に模様替えした。)

他人の書齋など覗きたくもないだろうが、参考までに何人かの方を紹介しておこう。いい出会いのきっかけになるかもしれない。そんな期待も込めて、原則として定年退官までの方を何人か紹介しようと思う。

### 教育観・学力観

#### ■ 荻谷剛彦(かりやたけひこ)

##### ☆プロフィール☆

1955年生まれ。東京大学大学院教授を経て2008年よりオックスフォード大学教授。専攻は教育社会学。

##### ☆ここがお薦め☆

『格差社会と教育改革』(2008年 岩波ブックレット)や『学力と階層』(2012年 朝日文庫 単行本は2008年)などが、硬派の荻谷本の中では読みやすいお薦め本。教育制度や教育改革が、どこに向かおうとしているのかが分かる。これって現場教師には縁遠く思われるかもしれないが、文科省のネコの目政策に右往左往しない「目」が育つこと請け合い。

#### ■ 佐藤学(さとうまなぶ)

##### ☆プロフィール☆

1951年生まれ。学習院大学文学部教授。東京大学大学院教育学研究科教授を経て、2012年より現職。教育学博士(東京大学)。国内数千校、海外数百校の学校を訪問し、学びの共同体の学校改革の研究と実践を積み上げている。

##### ☆ここがお薦め☆

学びの共同体については、とりあえず『学校を改革する——学びの共同体の構想と実践』(2012年 岩波ブックレット)を薦めたい。現場の取り組みを知りたい時は、『学校見聞録——学びの共同体の実践』(2012年 小学館)が比較的新しい。

## 国語教育

### ■白石範孝(しらいしのりたか)

#### ☆プロフィール☆

1955 年生まれ。東京都公立小学校教諭を経て、筑波大学附属小学校教諭となる。現在は明星大学教育学部講師、全国国語授業研究会理事、使える授業ベーシック研究会会長、学校図書国語教科書編集委員なども務める。

#### ☆ここがお薦め☆

筑波と言えば、奈良では二瓶弘行さんが有名だけど、私のイチ押しは白石さん。国語の授業ができない小学校教師なんて、全くもって絵にならない。本気で教師をしようと思うなら、この人の本を読んで、実践してほしい。お薦めは、『白石範孝の国語授業の教科書』（2012 年 東洋館出版社）と『白石範孝の国語授業の技術』（2013 年 東洋館出版社）の 2 冊。著書は一杯あるが、この 2 冊で国語授業のノウハウが自分のものになる、ハズ。

### ■桂聖(かつらさとし)

#### ☆プロフィール☆

筑波大学附属小学校教諭。山口県公立小学校、山口大学附属山口小学校、広島大学附属小学校、東京学芸大学附属小金井小学校教諭を経て、現職。全国国語授業研究会理事、使える授業ベーシック研究会常任理事、授業のユニバーサルデザイン研究会代表、光村図書国語教科書編集委員、『子どもと創る国語の授業』編集委員、教師の“知恵”.net 事務局。

#### ☆ここがお薦め☆

国語教師としては、白石さんの理論を受け継いでいる。そこに、授業のユニバーサルデザイン化という視点を加えたのが、桂さんの業績。具体的なことは、4 節の「授業記録を読む」で確認してほしい。白石+桂=現在の草尾流ということになる。お薦めの本は、『国語授業のユニバーサルデザイン—全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくり』（2011 年 東洋館出版社）。これ 1 冊で、授業のユニバーサルデザイン化の基礎基本が分かる。具体的な授業づくりには、『教材に「しかけ」をつくる国語授業 10 の方法 文学アイデア 50』（2013 年 東洋館出版社）『教

材に「しかけ」をつくる国語授業 10 の方法 説明文アイデア 50』(2014年 東洋館出版社)の2冊がいい。国語以外の教科のユニバーサルデザイン化なら、『授業のユニバーサルデザイン』(東洋館出版社)が2010年から年2冊のペースで刊行されている。

### 算数教育

#### ■田中博史(たなかひろし)

##### ☆プロフィール☆

1958年生まれ。筑波大学附属小学校教諭。山口県公立小学校教諭を経て1991年より筑波大学附属小学校教諭現在に至る。共愛学園前橋国際大学非常勤講師。基幹学力研究会代表・教育雑誌「基幹学力の授業国語&算数」(明治図書)編集長。全国算数授業研究会理事・算数授業ICT研究会代表・日本数学教育学会出版部幹事。NHK 学校放送番組企画委員として「かんじるさんすう 1・2・3」「わかる算数 6年生」や総合テレビ「課外授業ようこそ先輩」などの企画及び出演

##### ☆ここがお薦め☆

もっと早くにこの人に出会っていれば、多くの子どもを救えたのになあと思える師。ぶんけいの問題集に『算数の力』というのがあるが、それがこの人の監修による物だ。「四マス関係図」というのを使えるようになれば、文章問題がウソのように簡単に解ける。私は、算数的思考力とは、見えなかったものを見えるようにする作業の過程だと確信するに至った。

### 人権教育・総合学習

#### ■森実(もりみのる)

##### ☆プロフィール☆

1955年生まれ。大阪教育大学教授。

##### ☆ここがお薦め☆

総合学習を人権学習として展開した時の、あるいはまた、参加体験型

人権学習を推進した時の理論的リーダー。『わたし出会い発見』シリーズをはじめ、大阪府人権教育研究会の出版物には森さんが研究者の立場で参加しているものが多い。今じゃ古本ですが、『人権ブックレット 49 いま人権教育が変わる 国連人権教育 10 年の可能性』（解放出版社）なんか随分お世話になった。

■清水宏吉（しみずこうきち）

☆プロフィール☆

1959年生まれ。教育学者。大阪大学人間科学研究科教授。専攻は教育社会学・学校臨床学。

☆ここがお薦め☆

荻谷剛彦さんの仕事と重なる部分があり、共著書もある。2003年に東京大学から大阪大学に移られ、荻谷さんが2008年に渡英されてからは、人権教育の立場で学力の問題を論じる第一人者だと思う。『公立小学校の挑戦--「力のある学校」とは何か』（2003年 岩波ブックレット）、『学力を育てる』（2005年 岩波新書）、『公立学校の底力』（2008年 ちくま新書）、『全国学力テスト その功罪を問う』（2009年 岩波ブックレット）、最近の著書では（2012年 岩波ブックレット）『検証 大阪の教育改革 いま、何が起きているのか』『調査報告 「学力格差」の実態』（岩波ブックレット 2014年）『「つながり格差」が学力格差を生む』（亜紀書房 2014年）などがおすすめ。

教育課題

■尾木直樹（おぎなおき）

☆プロフィール☆

1947年生まれ。高校、中学の教員を経て、教育評論家。法政大学教職課程センター長・教授。臨床教育研究所「虹」主宰。

☆ここがお薦め☆

尾木ママで有名になるずっと前から、学級崩壊の現場を数多く訪ね、常に子どもの視点から発言していた良心的教育評論家。大阪で講演を聞いて、『「学級崩壊」をどうみるか』（NHK ブックス 1999年）を買ったのが出会い。『子どもの危機をどう見るか』（岩波新書 2000年）『いじめ問題をどう克服するか』（岩波新書 2013年）など、しゃべりとは違っ

て良書が多い。

■森田洋司（もりたようじ）

☆プロフィール☆

1941年生まれ。社会学者、大阪市立大学名誉教授。

☆ここがお薦め☆

いじめ問題の第一人者で、1980年頃には「いじめの4層構造」という視点を提起していた。「いじめっ子」と「いじめられっ子」の問題として語られていたいじめ問題を、集団のあり様の問題として提起されたことは、私の集団づくりのベースになった。近著に『いじめとは何か―教室の問題、社会の問題』（中公新書 2010年）がある。

■香山リカ（かやまりか）

☆プロフィール☆

1960年生まれ。評論家、精神科医、臨床心理士。立教大学現代心理学部映像身体学科教授。

☆ここがお薦め☆

メディアにしばしば登場する超有名な精神科医。そのコメントに人権教育の立場から親近感を覚えている。著書は山ほどあるのであえて紹介はしない。